

キャリル・チャーチルのEuropean Drama Award 受賞取り下げをめぐって

—イギリスのパレスチナ支援運動と *Seven Jewish Children* (2009)

金田 迪子

I はじめに

2022年にイギリス人女性劇作家のキャリル・チャーチル (Caryl Churchill, 1938-) が受賞を予定していたEuropean Drama Awardは、チャーチルがパレスチナ支援運動に関わっていたことを理由に授与が取り下げられたことが報じられた¹。取り下げの理由として同賞の審査員団は、受賞決定後にチャーチルがBDS (Boycott, Divestment, and Sanctions) 運動を支持していることが発覚したこと、チャーチルの*Seven Jewish Children: A Play for Gaza* (2009) が「反ユダヤ主義的 (anti-Semitic)」(Schubart Par. 2) な作品として読まれうる可能性があることを挙げている。*Seven Jewish Children*は、2008年12月から2009年1月にかけてイスラエル国防軍が行ったガザ地区への軍事侵攻に対する反応として書かれ、2009年の2月にロンドンのロイヤル・コート・シアター (Royal Court Theatre) で上演された。イスラエルと軍事侵攻に対する直接的な言及が含まれた本作は、同時代の紛争に対するアクチュアルな反応として支持された一方で、反ユダヤ主義的なプロパガンダとしてメディアに取り上げられ批判を受けるなど、初演時から大きな反響を得た²。本作は先行研究においても、批判を受ける一方、作中に描かれたイスラエルとパレスチナをめぐる問題の表象は多くの注目を集め、2020年に入ってからでは中近東の研究者による考察も見られるようになった³。2009年の初演から15年近くが経過した今、チャーチルの後期作品の中で最も重要な作品の一つとして本作の位置付けは定着しつつあるといえる。

この受賞取り下げが示す、興味深いことの一つは、ロンドンで活動するイギリスの俳優、劇作家、制作者にとっての、BDS運動や他のパレスチナ支援運動の身近さである。特にロイヤル・コート・シアターでは、本作の上演以前から、パレスチナの劇場への劇作家の派遣事業等が行われてきた⁴。受賞取り下げへは170人以上の俳優、劇作家、制作者による反応があったが、そこには劇作家のニコラス・ライト (Nicholas Wright) や演出家スティーヴン・ダルドリー (Stephen Daldry)、ロイヤル・コート・シアター芸術監督のドミニク・クック (Dominic

Cooke)の名が見られる。2023年10月19日に『アートフォーラム』(*Artforum*)誌のWebサイトに掲載された、アーティストたちによるパレスチナ支援のオープンレター(“An Open Letter”)が可視化したように、これらの運動は、イギリス・EU・アメリカといった、イスラエルの政策との「共犯的」(吉田 28)な関係の中にある西側諸国において、市民運動としてのパレスチナ支援運動が社会の中に立ち現れる例としても見ることができるが、この受賞取り下げは現代のイギリスの演劇関係者という共同体の中でも、同様の芸術実践と市民運動との結び付きがあることが示されている例といえるだろう。

本稿ではこれらのイギリスのパレスチナ支援運動との関係という文脈を念頭に置きながら、*Seven Jewish Children*において、なぜ“Tell her/Don't tell her”というリフレインが用いられているのかを考えてみたい。本稿では受賞取り下げに対する反応や、近年のBDS運動をめぐる議論の中で用いられる「ニュー・マッカーシズム (New McCarthyism)」という語と、*Seven Jewish Children*で繰り返し用いられる“Don't tell her”というリフレインと沈黙の関係について検討することを通して、本作のコンテクストの一つであるイギリスのパレスチナ支援運動と本作との関わりを検討する。

II 反ユダヤ主義 (Antisemitism) と「ニュー・マッカーシズム (New McCarthyism)」

2022年のチャーチルのEuropean Drama Awardの受賞取り下げに対して、同賞への助成を行うバーデン・ビュルテンベルク文部省の芸術大臣ペトラ・オルショースキー (Petra Olschowski) は、シャウスピール・シュトゥットガルト劇場のニューズレターで、本賞が特にドイツの公的助成を受けた文化賞であることを鑑みて、同国の歴史的責任からいかなる形態の反ユダヤ主義にも関与を表明することはできないと述べている (Schubart Par. 3)。

このような当局の声明には、2020年前後に顕在化した「反ユダヤ主義 (Antisemitism)」という語の使用をめぐる議論が背景として窺える。同年の11月にArtists for Palestine UKが発表したオープンレターでは、同劇場がBDS運動の支持を根拠にチャーチルの受賞を取り下げた点に関連して、ドイツ連邦議会においてBDS運動が「反ユダヤ主義的」(Nasr and Alkousaa Par. 1)な活動として可決された例に言及している。市民によるボイコットを通したイスラエルへの経済制裁を呼びかけることでパレスチナを支援することを目的としたBDS運動に対し、イスラエル側は、ユダヤ人に対する人種差別的な運動であるとする批判を行ってきた。この議決では、2019年の5月にテル・アビブで開催されたユーロヴィジョン大会のボイコットを通してイスラエルへの制裁を呼びかけるBDS

運動を、政治的な目的のために反ユダヤ主義的な戦略を用いる運動として見なすことが可決された⁵。

一方で、パレスチナ支援運動の側からは、この議決に見られるような「反ユダヤ主義」という語の扱いに対し、それを運動に対する弾圧であるとする批判が行われている。2018年にベルリン・ユダヤ博物館（the Jewish Museum Berlin）の館長を務めていたピーター・シェファー（Peter Scafer）が「エルサレムへようこそ（Welcome to Jerusalem）」展における反ユダヤ主義的な内容を問われて辞任を求められた事件⁶では、哲学者のミーシャ・ブルミク（Micha Brumik）が、このようなイスラエル政府による「反ユダヤ主義」という語を用いた公共の場における言論への介入を「ニュー・マッカーシズム（New McCarthyism）」（Asseburg Par. 18）となぞらえて批判を行った⁷。

ブルミクの「ニュー・マッカーシズム」は、2022年のチャーチルの受賞取り下げに反対するオープンレターの中でも、当局の対応を非難する文言の中に見ることができる。オープンレターの本文では、発起者たちはイスラエル支持者による「反ユダヤ主義」の非難に対し「このような良心の自由に対する攻撃は今日の社会におけるマッカーシズム（modern-day McCarthyism）以外の何者でもなく、ドイツ、またそれ以外の国々における脅迫と沈黙の強制に関する問題を早急に喚起している」（“Leading Lights” Par. 11）と述べている。また俳優のハリエット・ウォルター（Harriet Walter）は、「政治的な見解に基づきチャーチルに対する表彰を撤回するのはマッカーシズム（McCarthyism）を想起させるような恥ずべき行為である」（“Leading Lights” Par. 17）と指摘している。これらの支持者の声明を受けてオープンレターは「我々はキャリル・チャーチルを支持し、マッカーシズムに反対する（And we are proud to stand by Caryl Churchill and against McCarthyism）」と締めくくられている（“Leading Lights” Par. 16）。

これらの2020年前後のヨーロッパにおけるBDS運動に関する論争を経て、2022年のチャーチルの受賞取り下げに際して展開されたコメントからは、イスラエルとパレスチナの問題を扱う議論の中では、イスラエルへの制裁を求める行為が「反ユダヤ主義」と名指しされることにより非人道的な行為と見なされ、そのような批判的な行為もまた「ニュー・マッカーシズム」と名指し返されるように、双方に対する政治的な行為を、非人道的な行為を示す語と結び付けることにより、公共の場から排除しようとする力学が展開していることがわかる。この受賞取り下げのコメントに見られるように、イスラエルとパレスチナの問題に関する政治的な対立の中では、ある行為をどのように言い表すことで正当化し、あるいはどのように封じ込めるかという、発話または沈黙（silencing）をめぐる力学の存在が問題の一つとして意識されているといえる。

III *Seven Jewish Children* と沈黙

*Seven Jewish Children*は2008年12月から2009年1月にかけてイスラエル国防軍が行ったガザ地区への軍事侵攻に対する反応として書かれ、2009年の2月にロンドンのロイヤル・コート・シアターで上演された⁸。チャーチルは本作の制作と発表の経緯について、軍事侵攻の報道を受けて短期間で書き上げた、パレスチナの支援のための寄付を募ることを目的とした作品であるとインタビューに答えており、「この劇は演劇のイベントであるだけではなく、政治的なイベントである (It's a political event, not just a theatre event)」(Brown Par. 6)と述べている⁹。

本作の戯曲は約6ページに収まる長さであり、初演の上演時間も約10分程度の非常に短い作品である。本文には登場人物の名前が含まれておらず、俳優が読み上げる台詞のみが書かれているが、この台詞は「子供はこの劇に登場しない (No children appear in the play)」 「話者たちは成人であり、両親か、子供の親類でも構わない (The speakers are adults, the parents and if you like other relations of the children)」(Churchill 4) のように、タイトルとなっている子供たちの家族の間で交わされる会話であることがト書きにより指定されている。

冒頭のト書きに「登場人物たちはそれぞれの場面によって異なり、時代と子供も異なる (The characters are different in each small scene as the time and child are different)」(Churchill 4) とあるように、本作は時代と場所の異なる7つの短い場面に分かれており、それぞれの場面の語りは別の子供(たち)に対して語られる。この語りの対象となっているのは、タイトルで言及されている7人のユダヤ人の子供たちである。7つの場面にはホロコースト、ユダヤ人の移住、イスラエル建国とパレスチナ人の追放、第一次中東戦争、インティファダといったユダヤ人の歴史に関する重要な出来事を思わせる言及が含まれており、最後の場面が2008年から2009年にかけて起きたガザ紛争を扱っているとして検討されてきた¹⁰。

本作はユダヤ人の家族が幼い子供にユダヤ人の歴史を語る際に、どのようにその歴史を語るかの取捨選択がなされ、その結果として語られた知識を受け継いだ次世代の子供たちが生まれるかという、イスラエルとパレスチナの問題をめぐるイデオロギーの再生産の過程を描いていることが指摘されてきた。ララ・スティーヴンス (Lara Stevens) は、本作における子供はイスラエルとパレスチナをめぐる地政学的な紛争の“symbolic battleground” (155) として機能し、大人たちから受け渡される取捨選択された知識によってユダヤ人としてのアイデンティティが形成される過程を示していると論じている。

一方で本作は、そのような再生産の過程を、“Tell her/Don't tell her”という特徴的なリフレインを通して示すことによって、その中で行われる「語る／語ら

ない」という大人たちによる選択を前景化しているともいえる。*Seven Jewish Children*の台詞は特徴的な“Tell her”または“Don’t tell her”という命令形の繰り返しで構成されている。このリフレインに用いられている“tell”という動詞の目的語は「彼女 (her)」であり、これは不在の子供たちを指していると思われるが、“Tell/Don’t tell”という命令形によって自身の行動への制約を受けるのは、「彼女」に語る／語らないことを選択するように迫られている発話者の大人たちでもある。ここには、イスラエルとパレスチナの問題に関する議論においては、沈黙をめぐる力学が大きな役割を果たしているという認識が示されているといえる。子供たちが前世代によって取捨選択された言葉を歴史として内面化してだけでなく、発話者である大人たちもまた、何を発話し、何に対して沈黙しなければならないかというように、沈黙をめぐる規範によって行動を規定される存在として描かれる。

作中の“Tell her/Don’t tell her”という命令形を通して規定される、語るべき内容には揺れ動きが存在し、このことはイスラエルとパレスチナの問題を語る言葉がせめぎ合いの中で決定される過程を再現している。第1場でボグロムをめぐる交わされる最初の一組の台詞の中で、“Tell her it’s a game/Tell her it’s serious” (5) のように“game/serious”と対極的な単語が対置されることや、第2場でホロコーストによって命を落とした親戚の存在を子供たちに伝えるのあたり“Don’t tell her they were killed/Tell her they were killed” (6) のように“kill”という単語の扱いをめぐる対極の指示が交わされるように、作中では、子供たちに語り継がれるユダヤ人の歴史が、何を語るか／何を語ることを禁じるかの取捨選択の過程を経て決定されてきた様子が描かれる。また劇中では、これらの強制と禁止の繰り返しがいずれかの極に偏る瞬間を描くことによって、その力学の存在がより明確に表されている。アマル・ゴダ・アブドゥル・アジズ (Amal Gouda Abdel Aziz) が指摘するように、六日戦争を指していると思われる、6文の台詞からなる第5場は劇中で最も短い場面であるが (120)、この場面ではイスラエルの圧倒的な勝利を力強く肯定するように、“Tell her we won/Tell her brother’s a hero/Tell her how big their armies are/Tell her we turned them back/Tell her we’re fighters/Tell her we’ve got new land” (Churchill 9) と“Tell her”という肯定形だけが用いられ、語ることの強制の側面が強く表れる。一方で35文の台詞の内の17文を否定形の“Don’t tell her”が占める場面は、語ることの強い禁止を示唆しているといえる。これらの発話者たちの“Tell her/Don’t tell her”の間の揺れは、本作において、イスラエル支持のイデオロギーが、いかに何を語ることを許可するか／何を語ることを禁止するかという沈黙をめぐる力学によって規定されているかを示しているといえる。

このように、発話と沈黙という観点からイスラエルとパレスチナの問題を提示することを試みる劇の構造は、イスラエル支持者による「反ユダヤ主義」という語に対し、「ニュー・マッカーシズム」という語をもって対抗するパレスチナ支援運動のレトリックと、沈黙のポリティクスの批判という対抗的な戦略を共有する。チャーチルは2022年の受賞取り下げへの反対を表明するオープンレターで、本作の意図を以下のように説明している。

It is critical of Israel's treatment of Palestinians; it is not an attack on all Jews, many of whom are also critical of Israel policy. It is wrong to conflate Israel with all Jews. A political play has made political enemies, who attack it with slurs of antisemitism ("Leading Lights" Par. 20)

アナ・バーナード (Anna Bernard) は2014年に、イギリス都市部の文化におけるパレスチナ支援運動の展開を検討する中で、イギリスの現代演劇を例として取り上げ、人道的／政治的支持 (humanitarian/political advocacy) の差異という観点から分析を行っている。バーナードは *Seven Jewish Children* を同じくロイヤル・コート・シアターで上演された、パレスチナ支援運動に携わる中で命を落とした女性活動家レイチェル・コリー (Rachel Corrie) の手記を演劇化した *My Name is Rachel Corrie* (2009) との比較から検討する中で、*My Name is Rachel Corrie* がレイチェル・コリーの活動家的な側面を消去することによって、本来コリーが持っていたイスラエルとの政治的な対立関係を曖昧にし、立場を不問とするパレスチナへの人道的支持 (humanitarian advocacy) を観客に求める作品であったことに対し、*Seven Jewish Children* は自身のパレスチナ支持の立場を明らかにし、イスラエルに明確に敵対する政治的支持 (political advocacy) を打ち出した作品であったことを指摘している。上記の引用における“a political play has made political enemies”というチャーチルの2022年の発言は、改めてバーナードの分析を裏付けたといえる。

バーナードによる分析は、2012年にシアン・アディセシア (Siân Adiseshiah) が本作に対して行った「敵対的な劇 (antagonistic play)」(117) という評価を、同じテーマで書かれた *My Name is Rachel Corrie* との比較から党派性という観点で説明したといえる。さらに2022年の European Drama Award の受賞取り下げとそれに対するチャーチルのコメントは、チャーチルが「政治的なもの (political)」と認識するものが、そのような党派性から生まれる敵対性を孕むものであることを明らかにした。またオープンレターの中で本作と結び付けられた「ニュー・マッカーシズム」という語は、本作の中核にある語ることの強制／禁止という

構造と、パレスチナ支持派による戦略的な批判の類似をも示した。また本作に対するチャーチルの新たなコメントは、本作とパレスチナ支持側のレトリックとの共通項を示すのみならず、チャーチルの「政治的なもの」の認識の一片をも明らかにしているといえる。

IV 結論

本稿では*Seven Jewish Children* (2009) で特徴的に繰り返される“Tell her/Don't tell her”というリフレインに着目し、このリフレインに含まれる沈黙というモチーフと、パレスチナ支援運動において見られる「反ユダヤ主義」や「ニュー・マッカーシズム」といった語を用いたレトリックとの類似性を検討した。本作に見られるようなチャーチルの政治的な関与は、チャーチル自身のポスト演劇的な作風の変化と併せつつ、より詳細に検討される余地があるだろう。¹¹

註

- 1 European Drama Awardはドイツの劇場シャウスピール・シュトゥットガルト (Schauspiel Stuttgart) によって2020年に創設された演劇賞で、受賞者には同劇場の所在地であるバーデン・ビュルテンベルク (Baden-Württemberg) 州文部省 (Ministry of Science, Research and Arts) の助成の元、75,000ユーロの賞金が授与される。チャーチルの受賞は2022年4月11日に告知された後、同年11月1日に劇場から取り下げの声明が出され、同月17日にはArtists for Palestine UKのオープンレターと共に*The Guardian*紙上で報じられた (Sherwood)。受賞決定時の劇場及び審査員のコメントは同劇場のプレスリリース (Parpart) で参照することができる。
- 2 メディアによる否定的な反応の例としては、*The Atlantic*に掲載されたジェフリー・ゴールドバーグ (Jeffrey Goldberg) による劇評などが挙げられる。ゴールドバーグは本作の初演に対する劇評で、ユダヤ人がパレスチナ人への憎悪を露わにする場面を含む本作を「反ユダヤ的なアジプロ劇 (anti-Jewish agitprop play)」と評し、本作に描かれているユダヤ人像是「最悪の反ユダヤ的なステレオタイプ (the worst anti-Jewish stereotypes)」であると非難した。(par. 1)
- 3 否定的な評価の例としてはキャサリン・リーダー (Kathryn Leader) が、上演当時の劇評において、作品の反動的な側面と、観客のエージェンシーの問題の2点に関して行っている。肯定的な評価の例としては、レイチェル・クレメンツ (Rachel Clements) がジュディス・バトラーのあやうい (precarious) 身体概念と本作中の子供との比較から、ミケル・ラクマン (Michał Lachman)

- が歴史記述の問題から行っている。またミリアム・フェルトン-ダンスキー (Miriam Felton-Dansky) は上演当時の戯曲の配布による上演の広がりやそれに応答するコメント、改変版の戯曲の流出などから本作の影響を調査した。
- 4 アナ・バーナード (Anna Bernard) はロイヤル・コート・シアターのパレスチナ支援の取り組みの例として、1982年のポール・ケンパー (Paul Kember, 1941-) の *Not Quite Jerusalem* (1987) の上演や、1995年から同劇場が企画しているヨルダン川西岸地区の劇作家とのワークショップを挙げている (166)。
 - 5 イギリスではBDS運動の一環として、国内のテレビ局に対してユーロヴィジョンに関する報道の中止や、開催地の変更を訴える運動が行われた。チャーチルは2018年の投書 (“Boycott”)、2019年の投書 (“The BBC”) の両方の投書に署名を行っている。
 - 6 ベルリン・ユダヤ博物館の「エルサレムによろこそ」展は2017年12月から2019年5月まで開催された。シェファーは会期中の2018年6月に館長を辞任した。同博物館は2012年にジュディス・バトラー (Judith Butler) とブルミクを招聘しパネル・ディスカッションを行っており、講演の内容が「反ユダヤ主義」的であると判断されたことも辞任要請の要因の一つとなった。
 - 7 左派ニュースメディアのWorld Socialist Web Siteでは、2019年のドイツ連邦議会による議決を報じる記事の中で、ピーター・シェファー (Peter Scafer) の辞任を引き合いに出し、ブルミクがシェファーに対する辞職の要請を「新たなマッカーシズムの一形態 (a new form of McCarthyism)」(Fuchs Par. 15) となぞらえたことを挙げている。
 - 8 *Seven Jewish Children*が批判の対象としているとされる2008年12月から2009年1月にかけてのガザ紛争においては、パレスチナ側に1,400人以上の民間人の死者が出たにも関わらず、イスラエル側の被害は死者13人とどまったことが報じられた。この結果を受けて、2009年の9月には国連の人権理事会により、イスラエルとハマスの両方が人権を侵害し、戦争犯罪を犯したとする判断がなされた。
 - 9 2009年2月のロイヤル・コート・シアターでの初演は無料で行われ、代わりにロンドンのパレスチナ支援団体MAP (Medical Aid for Palestinians) への寄付が募られた。また本作の全文はPDFデータでロイヤル・コート・シアターのWebサイトからダウンロードすることができ、終演後にMAPへの寄付を募ることを目的に上演料が免除された。
 - 10 ジナン・ワヒード・ジャシム (Jinan Waheed Jassim) は2022年に「ホロコーストから始まり、イスラエル建国とパレスチナ人の追放、1948年の戦争、インティファダ、水をめぐる紛争へと移り、ガザ紛争で終わる」(247) と本作の各場面の分析を行っている。
 - 11 吉田裕がチャーチルのインタビューから確認しているように、チャーチルが2009年の初演当時、イギリスによるパレスチナの委任統治を始めとした、イギリスとイスラエルの共犯関係に関する局面の批判が本作から抜け落ちてい

ることを自覚していたことは興味深い (28)。本作とイギリスのパレスチナ支援運動に関するさらなる考察には、西側諸国におけるポピュラーな抵抗運動としてのパレスチナ支援運動と、イスラエルとパレスチナの問題をめぐる西側諸国の「共犯的な」立場の認識の検討が必要となるだろう。

参考文献

- “An Open Letter from the Art Community to Cultural Organizations.” *Artforum*, 19 October, 2023. <https://www.artforum.com/columns/open-letter-art-community-cultural-organizations-518019/>.
- Aziz, Amal Gouda Abdel. “The Politics and Poetics of Oppression in Caryl Churchill’s *Seven Jewish Children*.” *International Journal of Language and Literary Studies*, vol. 2, no. 1, 2020, pp. 116-23, doi:10.36892/ijlls.v2i1.163.
- Adiseshiah, Siân. “Political Returns on the Twenty-First Century Stage: Caryl Churchill’s *Far Away, Drunk Enough to Say I Love You? And Seven Jewish Children*.” *C21 Literature: Journal of 21st-Century Writings*, vol. 1, no. 1, 2012, pp. 99-117.
- Asseburg, Muriel. “Putting the Controversy About BDS in Germany into Perspective.” *Palestine-Israel Journal*, Vol. 24, No.3, 2019. <https://pij.org/articles/1964/putting-the-controversy-about-bds-in-germany-into-perspective>.
- “The BBC should press for Eurovision to be moved from Israel.” *The Guardian*, 29 Jan. 2019. <https://www.theguardian.com/tv-and-radio/2019/jan/29/the-bbc-should-press-for-eurovision-to-be-moved-from-israel>.
- Bernard, Anna. “Taking Sides: Palestinian Advocacy and Metropolitan Theatre.” *Journal of Postcolonial Writing*, vol. 50, no. 2, 2014, pp. 163-75, doi:10.1080/17449855.2014.883174.
- “Boycott Eurovision Song Contest Hosted by Israel.” *The Guardian*, 7 Sep. 2018. <https://www.theguardian.com/tv-and-radio/2018/sep/07/boycott-eurovision-song-contest-hosted-by-israel>.
- Brown, Mark. “Royal Court Acts Fast with Gaza Crisis Play.” *The Guardian*, 24 Jan. 2009. <https://www.theguardian.com/stage/2009/jan/24/theatre-gaza-caryl-churchill-royal-court-seven-jewish-children>.
- Churchill, Caryl. *Plays: Five*. Nick Hern Books, 2019.
- Clements, Rachel. “Framing War, Staging Precarity: Caryl Churchill’s *Seven Jewish Children* and the Spectres of Vulnerability.” *Contemporary Theatre Review*, vol. 23, no. 3, 2013, pp. 357-367.
- Felton-Dansky, Miriam. “Clamorous Voices: *Seven Jewish Children* and Its Proliferating Publics.” *TDR*, vol. 55, no. 3, 2011, pp. 156-64. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/>

- stable/23017940.
- Fuchs, Sybille. "German Cultural Institutions Oppose Government's Anti-BDS Resolution Aimed at Quashing Criticism of Israel." *World Socialist Web Site*, 3 January 2021. <https://www.wsws.org/en/articles/2021/01/04/cult-j04.html>.
- Goldberg, Jeffrey. "The Royal Court Theatre's Blood Libel." *The Atlantic*, 9 Feb. 2009. <https://www.theatlantic.com/international/archive/2009/02/the-royal-court-theatre-apos-s-blood-libel/9521/>.
- Jassim, Jinan Waheed. "The Invisible Little Victims: Seven Jewish Children: A Play for Gaza and the Arab-Israeli Conflict." *Mustansiriyah Journal of Arts*, vol. 44, no. 90, 2020, pp. 239-63. <https://www.iasj.net/iasj/article/191015>.
- Lachman, Michał. "Performing History: Caryl Churchill's Theatrical Historiography from "Light Shining in Buckinghamshire" to "Seven Jewish Children"." *Hungarian Journal of English and American Studies*, vol. 19, no. 2, 2013, pp. 415-35, JSTOR, <http://www.jstor.org/stable/44789687>.
- Leader, Kathryn. "Tell Her to Be Careful: Caryl Churchill's *Seven Jewish Children*: A Play for Gaza." *Platform Journal of Theatre and Performing Arts*, vol. 4, no. 1, 2009, pp. 132-36.
- "Leading Lights of British Theatre Accuse European Drama Prize of Modern-Day McCarthyism." *Artists for Palestine UK*, 17 Nov. 2022. <https://artistsforpalestine.org.uk/2022/11/17/leading-lights-of-british-theatre-accuse-european-drama-prize-of-modern-day-mccarthyism/>.
- Nasr, Joseph and Riham Alkousaa. "Germany designates BDS Israel Boycott Movement as Anti-Semitic." *Reuters*, 18 May 2019. <https://www.reuters.com/article/germany-bds-israel-idUSL5N22T4OA>.
- Parpart, Katharina. "Caryl Churchill Receives the European Drama Award 2022." *Schauspiel Stuttgart*, 11 Apr. 22. https://www.schauspiel-stuttgart.de/download/33536/220411_european_drama_award_2022_churchill_lagushonkova_pr_schauspiel_stuttgart.pdf.
- Schubart, Julia. "The 2022 European Drama Award Will Not Be Conferred." *Schauspiel Stuttgart*, 2022. https://www.schauspiel-stuttgart.de/download/38097/schauspiel_stuttgart_european_drama_award_caryl_churchill_01_nov_22_pm_en.pdf. 28 Oct. 2023.
- Sherwood, Harriet. "Cancellation of Award for Playwright Caryl Churchill Condemned." *The Guardian*, 17 Nov. 2022. <https://www.theguardian.com/stage/2022/nov/17/cancellation-of-award-for-playwright-caryl-churchill-condemned2023/10/28>.
- Stevens, Lara. *Anti-War Theatre after Brecht: Dialectical Aesthetics in the Twenty-First Century*, Palgrave Macmillan, 2016.
- 吉田裕「占領者の自我が崩壊するとき—キャリル・チャーチル「七人のユダヤ人の子供たち」をめぐる—」『las barcas』2, 2012年、pp.24-30.